

# 姪子

伊藤左千夫

青空文庫



麦むぎつき搗あらも荒あらましになつたし、一番草も今日でお終しまいだから、おとツつあん、熱いのこに御  
 苦勞なつがりだけつと、鎌を二三丁買つてきてくるつだいな、此この熱い盛りなつがりに山の夏刈なつがりもやりたい  
 し、畔あぜくさ草も刈つねばなんねい……山刈りを一丁に草刈りを二丁許ばかり、何処どこの鍛冶屋かじやでも  
 えいからつて。

おやじがこういうもんだから、一と朝起きぬきに松尾へ往いつた、松尾の兼鍛冶かねが頼みつ  
 けで、懇意だから、出来合があつたら取つてくる積りで、日が高くなると熱くてたまんね  
 から、朝飯前に帰つてくる積りで出掛けた、おらア元から朝起きが好きだ、夏でも冬でも  
 天氣のえい時、朝つばらの心持つたらそらアえいもんだからなア、年をとつてからは冬の  
 朝は寒くて億劫おつくうになつたけど、其その外ほかん時には朝早く起きるのが、未だいまにおれは楽し  
 さい。

それで其朝は何んだか知らねいが、別わけて心持のえい朝であつた、土用半ばに秋風が立  
 つて、もう三回目で土用も明けると云う頃だから、空は鏡のように澄んでる、田のものに  
 も畑のものにも夜露がどつぷりと降りてる、其涼しい氣持つたら話になんかつた。

腰まで裾を端しよつてな、素すつ膚足ばだしに朝露のかかるのはえいもんさ、日中焼けるように

熱いのも随分つれいがな、其熱い時でなけりや又朝っぱらのえい気持ということもねい訳だから、世間のことは何でもみんな心の持ちよう一つのもんだ。

それから家の門を出る時にや、まだ薄暗かったが、夏は夜明けの明るくなるのが早いから、村のはずれへ出たらもう畑一枚先の人顔が分るようになった、いつでも話すこつたが、そんな時おれが、つくづく感心したのは、そら今ではあんなに仕合せをしてる、佐兵エどの家内よ、あの人があたしか十四五の頃だな、おれは只遠い村々の眺めや空合の景色に氣をとられて、人の居るにも心づかず来ると、道端に草を刈つてた若い女が、手に持った鎌を措おいて、

「お早ようございます」

と挨拶したのを見るとあの人さ、そんな善吉はまるつきり小作づくりであつたから、あの女も若い時から苦労が多かつた。

村の内でも起きて居た家は半分しか無かつた、そんなに早いのに、十四五の小娘が朝草刈りをしているのだもの、おれはもう胸が一ぱいになつた位だ。

「おう誰かと思つたら、おちかどんかい、お前朝草刈をするのかい、感心なこつたねい」  
おれがこう云つて立ち止まると、

「馴れないからよく刈れましね、荒場のおじいさんもたいそうお早くどこへいきますかい」  
 そう云つて莞爾にっこり笑うのさ、器量がいというではないけど、色が白くて顔がふっくらしてるのが朝明りにほんのりしていると、ほんとに可愛い娘であつた。

お前とこのとツつあんも、何か少し加減が悪いような話だがもうえいのかいて、聞くと、おやじが永らくぶらぶらしてますから困つていますと云う、それだからこうして朝草も刈るのかと思つたら、おれは可哀そうでならなかつた、それでおれは今鎌を買いに松尾へ往くのだが、日中は熱いからと思つてこんなに早く出掛けてきたのさ、それではお前の分にも一丁買つてきてやるから、折角丹誠してくれやて、云つたら何んでも眼をうるましたよ。うだつた、其時のあの女の顔をおれは未だに覚えてる、其の後、家のおやじに話して小作米の残り三俵をまけてやつた、心懸けがよかつたからあの女も今はあんなに仕合せをする。

これでは話が横道へ這入はいつた、それからおれが松尾へ往きついてもまだ日が出なかつた、松尾は県道筋について町めいてる処へ樹木に富んだ岡を背負つてるから、屋敷構やしきがまえから人の気心も純粹の百姓村とは少し違つてる、涼しそうな背戸山では頻りに蝸しきが鳴ひぐらしいてる、おれは又あの蝸の鳴くのが好きさ、どここの家でも前の往來を綺麗きれいに掃ほうきめいて、掃木目の新しい

庭へ縁台を出し、隣同志話しながら煙草など吹かしてる、おいらのような百姓と変らない手足をしている男等までが、詞ことばつかいなんか、どことなし品がえい、おれはそれを真似ようとは思わないけど、横芝や松尾やあんな町がかつた所へいくと、住居の様子や男女の風俗などに気をつけて見るのが好きだ。

兼鍛冶のそこへ往つたら、此節は忙しいものと見えて、兼公はもう鞆ふいごば場に這入つて、こうこうと鞆の音をさして居た、見ると兼公の家も氣持がよかつた、軒の下は今掃いた許りに塵ちり一つ見えない、家は柱も敷居も怪しくかしては居るけれど、表手おもても裏も障子を明あ放けはなして、畳の上を風が滑つてるように涼しい、表手の往来から、裏庭の茄子なすや南かぼちゃ瓜の花も見え、鶏けいとう頭ほうせんか鳳てんじくぼたん仙花天竺牡丹の花などが背高く咲いてるのが見える、それで兼公は平生花を作ることを自慢するでもなく、花が好きだなどと人に話しし為たこともない、よくこんなにも花を絶やさずに作つてますねと云うと、あアに家さ作つて置かねいと時折仏様さ上げるのん困るからと云つてる、あとから直ぐこういう鎌が出来ましたが一つ見えておくんせいと腕自慢の話だ、そんな風だからおれは元から兼公が好きで、何でも農具はみんな兼公に頼むことにしていた。

其朝なんか、よつほど可笑おかしかつた、兼公おれの顔を見て何と思つたか、喫びっくり驚した眼

をきよろきよろさせ物も云わないで軒口へ飛んで出た、おれが兼さんお早ようと詞を掛ける、それと同んなじ位に、

「旦那何んです」

とあの青白い尖とんがりぐち口の其のたまげた顔をおれの鼻つききへ持ってきていうのさ、兼さん何でもないよ鎌を買いに来たんだよ、日中は熱いから朝っぱらにやって来たのさ、こういうと、

「そらアよかった、まア旦那お早ようございます」と直ぐにけろりとした風で二つ三つ腰をまげた、ハハハアと笑ったかと思うと直ぐ跡から、旦那鎌なら豪せいなのが出来てます、いう内に女房が出て来て上がり鼻へ花はなむしろ座ざを敷いた、兼公はおれに許り其座へ腰をかけさせ、自分は一段低い縁に腰をかけた、兼公は職人だけれど感心に人に無作法なことはしなかつた。

「旦那聞いてください、わし忌ま忌ましくなんぬいことがあつですよ、あの八田の吉兵衛ですがね、先月中あなた、山刈と草刈と三丁宛ずつ、吟味して打つてくれちもんですから、こつちやあなた充分に骨を折つて仕上げた処、旦那まア聞いて下さい其の吉兵衛が一昨日来やがつて、村の鍛冶に打たせりや、一丁二十銭ずつだに、お前の鎌二十二銭は高いとぬか

すんです、それから癩しやくに障つちやつたんですから、お前さんの銭やお前さんの財布へしまつておけ、おれの鎌はおれの戸棚へ終しまつて措おくといつて、いきなり鎌を戸棚へ終つちやつたんです、旦那えい処へ来て下さつた」そういうて兼公は六丁の鎌をおれの前へ置いた、女房は、それではよくあんめい、吉兵工さんも帰りしなには、兼さんの一酷にも困る、あとで金を持たしてよこすから、おつかアおめいが鎌を取つといてくつだいよつて、腹も立たないでそういつていつたんだから、今荒場の旦那へ上げて終つてはと云つた、兼公はアにお前がそういうなら、八田の分はおれが今日にも打つて措くべい、旦那どうぞ持つていつて下さい、外の人と違う旦那がいるつてんだから、こういうから四丁と思つて往つたのだが、其六丁を持つてきた、家を出る時心持よく出ると其日はきつと何かの用が都合よくいくものだ。

思いの外に早く用が足りたし、日も昇りかけたが、蝸はまだ思い出したように鳴いてる、つくつくほうしなどがそろそろ鳴き出してくる、まだ熱くなるまでには、余程の間があると思つて、急に思いついて姪子の処へ往つた。

お町が家は、松尾の東はずれでな、往来から岡の方へ余程経上へつて、小高い所にあるから一寸ちよつと見ても涼しそうな家さ、おれがいくとお町は二つの小牛を庭の柿の木の蔭かげへ繫つない

で、十になる惣領そうりょうを相手に、腰巻一つになって小牛を洗つてる、刈立ての青草を籠に  
 一ぱい小牛に当てがって、母子がさも楽しそうに黒白斑まだらの方のやつを洗つてやつてる、小  
 牛は背中を洗つて貰つて平気に草を食つてる、惣領が長い柄ひしやくの柄杓ひしやくで水を牛の背にかけ  
 る、母親が縄たわしで頻りに小摺こずつてやる、白い手拭を間深かぶかに冠かぶつて、おれのいったの  
 も気がつかずにやつてる、表手の庭の方には、白らげ麦や金時大角豆などが庭一面に拵かぶ  
 て隙間もなく干してある、一目見てお町が家も此頃は都合がえいなと思うと、おれもおの  
 ずと気も引立つて、ちつと手伝おうかと声をかけた。

あらア荒場の伯父さんだよつて、母子が一所にそういつて、小牛洗いはそこそこにさす  
 が親身の挨拶は無造作なところに、云われないなつかしさが嬉しい、まア伯父さんこんな  
 形では御挨拶も出来ない、どうぞまア足を洗つて下さい、そういうより早く水を汲くんでく  
 れる、おれはそこまで来たから一寸寄つたのだ上つてる積りではねいと云つても、伯父さ  
 ん一寸寄つていくつてそら何のこつたかい、そんなこと云つたつて駄目だ、もうおれには  
 口は聞かせない。

上つて見ると鏡のように拭いた摺縁すりえんは歩りくと足の下がぎしぎし鳴る位だ、お町はや  
 がて自分も着物を着替て改つた挨拶などする、十になる児の母だけけれど、町公町公と云つ

たのもまだつい此間の事のように、其大人ぶった挨拶が可笑しい位だった、其内利助も朝草を山程刈つて帰ってきた、さつぱりとした麻の葉の座蒲団を影の映るような、カラ縁に敷いて、えい心持つたらなかつた、伯父さん鎌を六丁買ってきて、家でばつかそんなにいるかいちもんだから、おれがこれこれだと話すと、そんなら一丁家へもおくんなさいなという、改まつて挨拶するかと思うと、あとから直ぐ甘えたことをいう、そうされると又妙に憎くないものだよ。

あの氣転だから、話をしながら茶を拵<sup>こしら</sup>える、用をやりながらも遠くから話しかける。

「ねい伯父さん何か上げたくもあり、そばに居て話したくもありで、何だか自分が自分でないようだ、蕎麦<sup>そば</sup>鱧<sup>うしん</sup>でもねいし、鱧<sup>どじょう</sup>の卵とし位ではと思つても、ほんに伯父さん何にも上げるもんがねいです」

「何にもいらねいっち事よ、朝つばら不意に来た客に何がいるかい」

そういう所へ利助もきて挨拶した、よくまア伯父さん寄てくれました、今年は雨都合もよくて大分作物もえいようでなど簡単な挨拶にも実意が見える、人間は本気になると、親身の者をなつかしがるものだ、此の調子なら利助もえい男だと思つておれも嬉しかった、お町は何か思いついたように夫に相談する、利助は黙々うなずいて、其のまま背戸山へ出

て往つた様だった、お町はにこにこしながら、伯父さん腹がすいたでしようが、少し待つて下さい、一寸思いついた御馳走をするからつて、何か手早に竈かまどに火を入れる、おれの近くへ石臼いしうすを持出し話しながら、白粉しろこを挽ひき始める、手軽気軽で、億劫な風など毛程も見せない、おれも訳なしに話に釣り込まれた。

「利助どんも大分に評判がえいからおれもすっかり安心してるよ、もう狂あはれ出すような事あんめいね」

「そうですよ伯父さん、わたしも一頃は余程迷つたから、伯父さんに心配させましたが、去年の春頃から大へん真面目になりましたね、今年などは身しんしょう上しんしょうもちつとは残りそうですよ、金で残らなくてもあの、小牛二つ育てあげればつて、此節は伯父さん、一朝に二かつき位草を刈りますよ、今の了りようけん簡かんでいってくれればえいと思えますがね」

「実の処おれは、それを聞きたさに今日も寄つたのだ、そういう話を聞くのがおれには何よりの御馳走だ、うんお前も仕合せになつた」

こんな訳で話はそれからそれと続く、利助の馬鹿を尽した事から、二人が殺すの活いかすのと幾度も大喧嘩おおげんかをやつた話もあった、それでも終いには利助から、おれがあやまるから仲直りをしてくろて云い出し誰れの世話にもならず、二人で仲直りした話は可笑しかった。

おれも始めから利助の奴は、女房にやさしい処があるから見込みがあると思つていた、博打ばくちをぶつても酒を飲んでもだ、女房の可愛い事を知つてる奴なら、いつか納まりがつくものだ、世の中に女房のいらねい人間許りは駄目なもんさ、白粉は三升許りも挽けた、利助もいつの間にか歸つてる、お町は白粉を利助に渡して自分は手軽に酒の用意をした、見ると大きな巾きんちやく着 茄子を二つ三つ丸ごと焼いて、うまく皮を剥むいたのへ、花はな 鱈がつおを振つて醤油をかけたのさ、それが又なかなかうまいのだ、いつの間そんな事をやつたか其の小手廻しのえいことと云つたら、お町は一苦労しただけあつて、話の筋も通つて人のあしらいもそりや感心なもんよ。

すとなすとな音がすると思つてる内に、伯父さん百合餅ゆりもちですが、一つ上つて見て下さいと云うて持つて来た。

何に話かうまいって、どうして話どころでなかつた、積つても見ろ、姪子甥子おいごの心意気を汲んでみろ、其餅のまずかろう筈があるめい、山百合は花のある時が一番味がえいのだそうだ、利助は、次手ついでがあるからつて、百合餅の重箱と鎌とを持つておれを広福寺の裏まで送つてくれた。

おれは今六十五になるが、鯛平目たいひらめの料理で御馳走になつた事もあるけれど、松尾の百合

餅程にうまいと思つた事はない。

お町は云うまでもなく、お近でも兼公でも、未だにおれを大騒ぎしてくれる、人間はなんでも意気で以て思合つた交りをする位樂しみなことはない、そういうとお前達は直ぐとやれ旧道徳だの現代的でないのと云うが、今の世にえらいと云われてる人達には、意気で人と交わるというような事はないようだね、身勝手な了簡より外ない奴は大きな面をしていても、真に自分を慕つて敬してくれる人を持てるものは恐らく少なからう、自分の都合許り考えてる人間は、学問があつても才智があつても財産があつても、あんまり尊いものではない。

(明治四十二年九月)



# 青空文庫情報

底本：「野菊の墓」新潮文庫、新潮社

1955（昭和30）年10月25日発行

1985（昭和60）年6月10日85刷改版

1993（平成5）年6月5日97刷

入力：大野晋

校正：高橋真也

1999年2月13日公開

2005年11月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 姪子

伊藤左千夫

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>